

3. 農業機械の利用状況の変化

(1)深耕（プラウ）

事業実施前は93%(25/27)の農家が牛・水牛を使っていたが、事業実施1年後には大規模の農家の86%(6/7)及び中・小規模農家の40%(8/20)が耕耘機を使用している。さらに2年後には中規模農家の多くはトラクター、小規模農家は耕耘機を導入しており、農業構造ごとに機械の利用に特徴が見られる。なお、地区外に未整備のほ場があるにせよ、牛・水牛を利用する農家は事業実施1年後に70%(19/27)、2年度に37%(10/27)と大きく減少しており、小規模の農家が牛を飼っている状態である。

(2)収穫作業

事業実施前は全農家が手刈りだったが、事業実施1年後は手刈りが48%(13/27)、2年後は手刈りが11%(3/27)となった。コンバイン・ハーベスターについては、1年後は74%(20/27)、2年後は96%(26/27)の農家が利用するなど、収穫作業もほ場整備を契機に機械化が大きく進んでいる。

4. ほ場整備の農家満足度

ほ場整備前は天水農業地域であり、落水を用水路で受けて田越しかんがいが行われていたが、ほ場整備によりすべての農地に用水路が接続することになった結果、かんがい施設の満足度は事業実施前の33%(9/27)から74%(20/27)に大きく向上した。

農道の満足度は事業実施前の33%(9/27)から100%(27/27)に大幅に向上した。農家は、ほ場整備実施前には「他人の農地を経由しないと自分の農地に農業機械を持ち込めない」と不満を持っていたが、ほ場整備によりすべての農地に農道が接続されたことから、その不満が解消したものと考えられる。

5. ほ場整備による農家意欲の向上

ほ場整備後、78%(21/27)の農家が農業機械の購入意欲が向上したと回答。大規模層ほど農業機械の購入意欲が高まる傾向がある。ほ場整備と農業機械の導入には高い相関があると考えられる。

営農意欲全般については、67%(18/27)がほ場整備後向上したと回答。農業の機械化と同様に経営規模が大きいほど営農意欲が高まる傾向がみられる。

6. おわりに

モデルほ場整備地区における調査では、ほ場整備1年後、さらに2年後と農業の機械化が順次大きく進んだことが確認された。ほ場整備と農業機械等のインフラシステムをパッケージ化して輸出することが有効であるということを実証できたものと考えている。

(参考文献)

- 1)「ミャンマーにおけるモデルほ場整備の計画・設計」, 渡邊史郎等, 水土の知 85(2)P137-142,2017
- 2)「平成28年度農業インフラシステム海外展開促進調査報告書」, (一財)日本水土総合研究所